

認知症高齢者との世代間交流の発見から幼児教育改革と地域づくりへ

関西医科大学提供
作成日 2016年2月6日
更新日

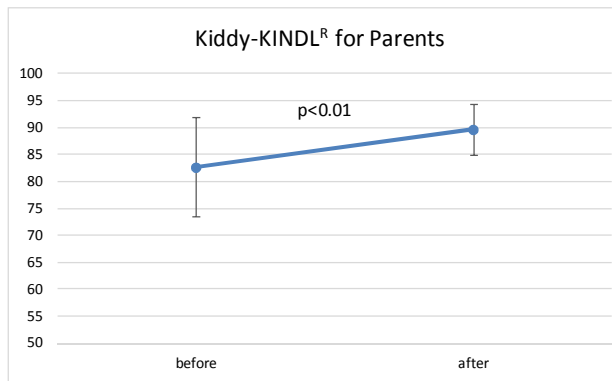


研究者氏名 すがたに やすゆき 菅谷 泰行	所属機関 関西医科大学医学部	関連キーワード(複数可) 世代間交流、認知症理解教育、地域づくり、幼老ケア
主な研究テーマ ・老年言語学と高齢者ケアコミュニケーション ・世代間交流と認知症理解教育		主な採択課題 ・基盤研究(C)平成25～28年度(配分総額:5,070千円) 課題名「世代間交流に基づく「認知症ケアリング教育」のためのプログラムと教材の開発」

① 科研費による研究成果

・超高齢社会を迎え、認知症に関わる諸問題が火急の課題となっている。当該の採択研究はそのような直面する諸課題のうち、特に世代間交流と認知症理解教育を推進することを目的として、(1)日本と海外における世代間交流と認知症理解教育の現状調査、(2)認知症ケアと認知症理解教育のためのシンポジウムの開催、(3)老人福祉施設で活用できる認知症高齢者と幼児のための世代間交流プログラムと教材の開発を行った。

・地域のソーシャルキャピタルの拡充などの視座から、世代間交流への期待は大きい。また認知症についての正しい知識の普及を目指して、全国で成人や子どもを対象とする認知症サポーターの養成が大規模に進められている。本研究はこれらの社会的ニーズをベースにして、子どものQOLの向上や「こころの教育」にも繋がる教育プログラムの開発とその社会への浸透を最終目標としており、この事業達成による教育的・社会的波及効果は小さくないと予想している。



右の図は開発したプログラムの結果を示す。交流後、幼児のQOLが有意に改善されていた。

② 当初予想していなかった意外な展開

・①に記載した研究成果のうち、(2)のシンポジウムはドイツアルツハイマー協会等と共催し、ドイツのアルンスベルク市で開催した。ドイツの有力紙の一つであるWestfalenpostやSauerland放送など、多くのメディアによって報道され、注目を集めた(右下の新聞記事はこのシンポジウムの様子を知らせるWestfalenpost紙)。

・(3)の研究では当初、高齢者に対する幼児のファミリーの増進を予想していたが、それに加えて、QOLと自尊心の著しい改善が認められた(①のグラフを参照)。またQOLの得点が低い幼児の交流後の改善が顕著であることも確認された。



③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

・少子高齢化が進み、認知症への対応が社会の緊急課題となっている。本研究をさらに発展させることにより、認知症に強い地域社会の実現、そのような地域社会を担うリーダーの養成、更には認知症ケアと認知症理解教育の発展のための国際的ネットワークの形成などへ進展する可能性をもつものである。